

樋口一葉の読書について

青 木 一 男

一

ある作家とその文学をどうとらえどう理解していくかということ
が、その作家の研究にとって重要であることは言うまでもない。どの
ような問題点をとりあげて研究し論述しようとも、窮極において、そ
の作家とその文学をどのようなものとして理解し評価するかにつな
がっていく。樋口一葉は数えの二十五歳で没し、残した作品も非常に少
ないにもかかわらず、多くの読者を得、多くの知友、評論家・研究者
によって語られてきた。そして、一葉観というものがかなり多様であ
ることも興味深い。この点に関しては、関良一氏が次のように分析し
ている。

これまでの一葉観は、基本的には、④抒情詩人風に、芸術派の作
家とみる型、⑤虚無的なリアリストとみる型、⑥文明批評家肌の、
人生派の作家とみる型、にわかれるのではないだろうか。さらに、
それに関連して、⑦古風な、前近代的な、いわゆる *last woman of*

old Japan とみる型と、その逆に⑧進歩的な女性の先駆とみる型と
がある。また、一葉の人柄を、⑨下町風のおてんばな、したたかも
のとみる型と、⑩士族の娘らしい、しとやかな山の手風のお嬢さん
タイプとみる型とがある。^{注1}

この分析の中で⑨は一葉の人柄を傷つけるような悪意があつての評
ではないかとさえ受け取られる発言であるが、これは一葉が通つた歌
塾（萩の舎^{はぎのや}）の先輩であり、半井桃水から離れた後の一葉に作品発表
の場を紹介するなどの好意を示している三宅花圃^{はなぼ}によるものである。

これは、後年花圃が一葉の思い出を述べたとき^{注3}、一葉をよく言えば
才気煥発、悪く言えばあばずれで得手勝手な女性とみた発言をしてい
る。これに対し、歌塾の中でも平民組と称して常に一葉と行動を共
にしていた親友の伊東夏子^{なつこ}（後、田辺姓）は⑪の立場に立つて花圃と
鋭く対立している。しかし、関氏も言われるように「士族の娘らし
い、しとやかな山の手風のお嬢さんに印象づけた張本人は、もちろん
一葉本人^{注1}」であつたのだろうし、また花圃が見抜いたような下町風の

闊達な半面も一葉は持っていたのではなからうか。

ところで、花園の一葉観は次のような記事によって知ることができ
る。

私が夏子（一葉女史）を初めて見たのは、歌子先生の処でした——中島歌子です。一葉さんは殆ど全く歌子にばかり学んだので他には師と申すべき人はございません——其時は夏子が師匠の許に塾生のやうに入つてゐたのでした。或時私と同伴の一婦人と二人連れで歌子先生の処へ参りますと、其時お茶や五目の鮎の饗応に預かりました、その通ひを見知らぬ婦人がするので。私が其の時十七歳と記憶をりますから夏子が二歳下で十五歳の折です。「今まで知らない人だが……新しく来たのかしら」などと思ひながら見えますと、髪などを恚う——変つた結び方にして、（一つは髪が薄かつたからでせうが）そればかりでなく起居挙動も何となく変つてゐて、ぢきに「元緑風」といふ様な感じが起りました。「まあ紙園のお梶とでも言ひたいやうな人だ」と思つてをります——その内にお鮎も戴いて了つて、ふと同伴の婦人が其皿の文字を見て、「清風徐来水波不_レ起が書いてありますね」と私に申しますと、恰_レ茶の通ひに出て居た夏子が、それを聞くと其の赤壁之賦の後の文句を、茶を注ぎながらペラペラと読み初めたぢやありませんか。一寸気取つたやうな風をして……。「おや変つた人だ」と思ひながら聴いてゐますと、とう／＼、ペラペラと読んで了ひました。「知つてゐるにしても其處場合にペラペラやり出さなくなつていいに……。それ

でもまあ知つてゐるだけは感心だわね」などと、同伴の婦人と話し合つた事でしたが、なにせよ其頃の夏子は才氣が溢れて止められぬと申すやうな風でした。^{注3}

この文章は一葉をしのぶ文でありながら一葉に対する暖かみに欠けるが、当日の一葉の印象がよほど小生意気に思えて、それが後々まで忘れられなかつたのかも知れない。しかし、一葉のそういった天心爛漫なふるまひはやがて消え、萩の舎の人々から「ものつつみの君」と渾名されるようになっていくのである。

ところで私が興味を引くのは、一葉が萩の舎に入門して間もないころ——明治十九年、数え年十五歳で入門——人の前で赤壁之賦をペラペラと読むほどの漢学の素養のあつたことである。明治二十年ころは、新聞も雑誌も書簡も文語文の時代であり、学問即漢学といった前代の遺風も残つていたのであるが、それにしても小学校も完全に卒えていない少女なのにと思ふのである。

もつとも彼女の早熟さについては、妹邦子の思い出がある。塩田良平博士は、

一葉の幼時については徴すべき文献もないが、明治七年十一月、読売新聞が発行され、樋口家でこれを購読し、兄達が声を出して読むとまだ三歳の夏子がこれを真似た。それが如何にも大人びてませていたので周囲の者が驚いたと、後に妹くに子はその母から聞いた^{注5} そうである。

と述べている。また、和田芳恵氏も、

明治十年に小学校に入学したが、教科書をぢき覚えてしまふので、教師は夏子に漢籍を教へねばならぬ始末であった。^{注6}

と書いている。一葉の幼時を彷彿とさせる文章である。

その後、明治二十六年（数え年二十二歳）になって一葉は下谷区龍泉寺町に転居^{注7}し、十か月ほど住んでいたが、その間に、「塵の中」と題する日記群を残している。俗塵の中で商売をして生計を立てようとした気持から、そのように題したものであろう。一葉はこの日記群の最初の「塵之中」（明治二十六年七月十五日から八月十日まで）の末尾に読けて、七歳ごろから中島歌子^{注8}に師事するまでを回想した文を書き綴っている。

そこには冒頭から、

七つといふとしより草々紙^{くさくさし}といふものを好みて、手まり、やり羽子をなげうちてよみけるが、其中にも一と好みけるは、英雄豪傑の伝、仁俠義人の行為などのそぞろ身にしむ様に覚えて、凡て勇ましく花やかなるが嬉しかりき。（下略）

と書かれている。右の記事から推察すれば、数え年の七歳のころから、子供らしいまりつきや羽根つきよりも草双紙の類を読みふけた読書好きであった。しかも、読む本は草双紙であり、とりわけ英雄豪傑の伝であったという。草双紙は江戸時代以来の伝統を受けつぐ絵入りの低俗読物であり、そういう幼少年向きの読み物ではない草双紙を子供が読むなどということを、親が喜ぶはずもない。

なつは母の眼を逃れて、土蔵にかくれ、窓から射しこむ薄明りを

たよりに草双紙類を読みふけた。そのため、小さい時からひどい近眼^{注9}になった。

と和田芳恵氏は書いている。親の眼を盗むようにしてまで読書をしたのが草双紙であり、英雄豪傑の伝であったというのは意外な感を与える。だが、これも幼少年向きの図書の乏しかった当時としては、さして怪しむこともないのかもしれない。ただ、草双紙は低俗な読み物ではあるが、大人を対象とした本であったから、七歳の子供に読みやすいものではなかったらうと考えられる。また、このようにして読書の楽しさを知った一葉が後年珠玉の作品を残すまでには、どのような読書遍歴があったかということにも興味がかかされる。

本稿では、読書遍歴を考察する第一歩として、樋口家の蔵書・小学校での国語教材・上野図書館の利用・知友からの図書の借覧や贈与について述べてみたいと思う。

二

一葉は七歳のときから草双紙を読んだというから、彼女の身邊に草双紙の類が置いてあったものと思われる。しかし、それらの本はたいした価値も認められるまま処分されたか、あるいは貸本だったので返却してしまっただか、ともかく樋口家の蔵書には残っていないようである。塩田良平博士は『樋口一葉研究』^{注10}の中で樋口家に現存している蔵書中、一葉在世中からのものとして左記の書物をあげている。

(一) 第一類 詩歌・歌論

- 古今和歌集(板)^{注11}
 新古今和歌集 全五卷中二・五卷(板)
 後拾遺和歌集上・下(板)
 千載和歌集二卷(板)
 万葉集廿卷(板)
 源氏物語引歌(板)
 和漢朗詠集上・下(板)
 新古今集鴨長明家集自讃歌(活)^{注12} 日本歌学全書第七
 怜野集一々十二卷(板)
 草野集一々十二卷(板)
 類題鴨河三郎集(板)
 類題鴨河次郎集(板)
 草菴集類題(板)
 和歌拾題(板)
 花の面影(活)
 くちなしの花 雪・月・花(板)
 名家戯歌集(板)
 千とせの門乾・坤(板)
 千紅万紫初集(板)
 万紫千紅(板)
- 岡持家集我おもしろ(板)
 絵入狂歌集(板)
 丹鶴百人一首宝庫(板)
 和歌書式(写)^{注13}
 枕歌 秋寝覺上・下(板)
 初学和歌式上・下(板)
 浜の真砂上・下(板)
 和歌八重垣七卷(板)
 黙坐逍遣集(板) 漢詩
- (二) 第二類 物語及び研究書
- 平家物語卷一々十二(写不明)^{注14}
 好色おぼえ張(写)
 竹取物語(写)
 伊勢物語(写)
 伊勢物語(邦子写)
 源氏物語(活) 日本文学全書第八の中
 竹取物語伊勢物語等(活) 日本文学全書第一の中
 栄華物語(板)
 珍本全集(活)
 部屋三味線(板)
 傾城買二筋道(板)

粹町甲閨(板)

手管
早引 廓節要(板)

敦盛源平桃(一々五)一冊(板)

大石兵六夢物語上のみ(活)

根奈志具佐(根無草)五の巻迄上・下(板)

藤竹むさしあぶみ(写)

九雲夢(写)

湖月抄一々五四卷(板)

源氏抄一々三(板)

源氏物語年立(板)

(三) 第三類 隨筆

徒然草上・下(板)

戲文軌範天・地・人(板)

狂文あつまなまり上・下(板)

京伝
馬琴 稗史三大家文集(板)

風来六部集(板)

佩
或 女小学(板)

東京樂事(板)

經濟隨筆(写不明)

徒然草金槌一々十二(板)

枕草子春曙抄十二卷(板)

(四) 第四類 手紙文集

月なみ消息(写)

宝丹經驗録(活)

(五) 第五類 歴史書

増補 日本外史五・六・七・八卷(板)

(六) 第六類 雜

聖学自在(写不明)

献策(写不明)

紫輿略談(写不明)

三国通覽図説(写不明)

灘波の夢二・三・四卷(写不明)

関の秋風(写不明)

吾孀箏譜(板)

臺門指月鈔(板)

国産名譽・正氣歌蛇足・遊行噴飯集上・下(活)

勸善訓蒙(板)

天然地理書(板)

筆算訓蒙(板)

小学高等読本(活)

- 榮曆(板)
 哇部類第三編(板)
 古文前集三冊(板)
 古文真宝上・下(板)
 本朝服暇考(板)
 瑜伽師地論釈(板)
 小学内・外篇(板)
 古註千字文(板)
 実語教註(板)
 京都めく里上・下(板)
 国花万葉記二十二冊(板)
 尚古仮字用格(板)
据弘 雑注 漢語大和故事一〜四(板)
探略 出明 令典熟字解初篇(板)
 和漢書画名鑑(板)
 早字引節用集(板)
 書画集覽(板)
 和事始(和漢事始)全六卷中一・二・三卷(板)
 漢事始全六卷中一・二・三卷(板)
 年数早見一覽上・下(板)
 記事論説大全下のみ(板)
 塩田博士は、「右の中、則義だけが読んで一葉に伝はつたものもあ

るが、大部分は一葉が一応目を通したものであらう。」と解説している。

右の書物で注目されるのは、まず古典類の多いことで、当時の教養源の傾向をうかがい知ることができよう。また、古典の読解を助けるための注釈書も当時は少なく、湖月抄により源氏を読み、春曙抄によって枕草子を読んでいることも注目される。また、右の書物名の下に(写)とある例がかなりある。これは一葉が写本したものと推定されているが、塩田博士によれば、土佐日記や源氏物語桐壺の不完全な写本も残っているそうである。^{註5} これら写本は、版本であれ写本であれ、ともかく自分が読もうとする本を書写しながら覚えかつ書法も覚えていくという古典学習法によるものである。

次に言えることは、古典の中でも歌集の多いこと、平安古典の多いことである。これは歌塾(萩の舎)に入門したことに関係が深いと思われる。すなわち、作歌の範として古歌を味読するとともに、和歌の道を学ぶ者の基礎学として平安として平安古典に親しんでいったのであらう。(なお付言すれば、萩の舎では、源氏物語など古典の講義も行われたのである。)

三二

子供の教育にとって学校の占める役割は大きい。まして、今日のように学校以外の教育機関が充実している時代と違って、明治十年代に

おいては、小学校での教育がどれほど大きかったか想像にあまりあるものである。一葉の読書生活についても小学校での教育が大きな位置を占めているはずである。

ここで、一葉の学歴を見直しておこう。^{註6}

明治十年（一八七七） 五歳（満年齢）

三月、本郷学校に入学、月末に退学。秋、吉川富吉の経営する

私立吉川学校に入学、『小学読本』『四書』の素読を学んだ。

明治十一年（一八七八） 六歳

六月、吉川学校下等小学第八級を卒業七級に進んだが、この年

のうちに退学。

明治十二年（一八七九） 七歳

明治十三年（一八八〇） 八歳

明治十四年（一八八一） 九歳

十一月 下谷元黒門町の私立青海学校小学二級後期に入学。

明治十五年（一八八二） 十歳

十一月 小学一級前期を卒業。

明治十六年（一八八三） 十一歳

五月、青海学校小学中等科第一級を五番で卒業。十二月、同校

小学高等科第四級を首席で卒業。次の第三級に進まず退学。

右のように一葉は、きちんと満六歳で就学したのではなく、退学までも継続して通学してもいない。こう見てくると一葉の就学状態は望ましいものではなかったと言えるが、さりとて当時の教育水準からみ

れば低いというわけではなかった。ちなみに事典の義務教育の項を参照してみると次のように示されている。

日本の義務教育制度は、一八七二（明治五）年の「学制」に始まる。しかし、実情に即していえば、一八七九年の「教育令」と翌一八八〇年の「改正教育令」がその発端であるといつてよい。「改正教育令」は六歳から十四歳までを学齢とし、「小学三箇年ノ課程」を終るまでは、少なくとも「毎年十六週以上」就学させることを保護者に義務づけている……（下略）^{註7}

これから考えれば、一葉の就学は規定以上と見なされるだろう。なお、義務教育は一九〇〇（明治三十三）年に四年、一九〇七年に六年、

一九四一（昭和十六）年に八年、一九四七年に九年になっている。

ところで、本稿では一葉の就学状況を論じたいのではなく、その就学期間にどのような国語教材を読んでいたかを調べてみたいのである。本題に論をもどしていこう。

前にあげた「一葉年譜」の明治十年の項に一葉が『小学読本』と『四書』を学んだことが記されている。この『小学読本』を学んだということは、文部省の定めによる『読本』を読んだ証拠となるだろう。では、明治前期における教科書編纂の事情はどんなものであったろうか。長谷川泉氏は次のように説明している。

学校の基礎が確立されれば、当然教科書のことの問題となる。新政府に文部省が設置されたのは、明治四年である。文部省は編纂寮の設立、さらに東京師範学校、および文部省編集課で小学教科書の

編纂に着手し、明治十三年には編纂局を置いて編纂の作業を推進した。その一方、公私の著訳書で教科書とするに足るものは、その書目を示して、単なる営利の図書を排除することをなした。明治十八年には文部省編纂の図書が三百余种に及んだ。また府県から報告を求めた採用教科書は九百二十五種であったとする^{注16}。

これによって、一葉就学時の教科書は、文部省において編集したものと、文部省で教科書とするに足るとした書物とがあったことがわかるが、それらによっておおむね教科書は足りていたのであろう。

さて、一葉は具体的にどんな国語教科書を学んだのであろうか。一葉の年譜に明治十年に吉川学校に入り、『小学読本』を読んだとある。私の手許には、

A 師範学校編纂『小学読本』 明治七年八月改正 文部省刊行

△田中義廉編纂▽

B 『小学読本』 明治七年五月 文部省 △榊原芳野編次▽

があるが、Aの初版は明治六年三月で、翻訳文によって編集されていた。特に巻一、二などは当時アメリカにおいて普及していたウイルソン・リーダーの翻訳によっていた。「七年版は六年版の不自然な直訳を改め、わが国の事情や児童の程度に応ずるように全体にわたって修正を加え^{注19}」たということである。Bの初版も明治六年で、首巻および五巻からなっている。明治七年五月の改正で首巻が巻一に収められて五冊本になっている。

次に両教科書の内容であるが、A田中本は文明開化の時代を反映し

ている。『小学読本巻一』の「第一」を示すと、

凡地球上の人種は、五に分れたり、亜細亞人種、歐羅巴人種、馬來人種、亞米利加人種、亞弗利加人種、是なり、日本人は、亜細亞人種の中なり」

人に、賢きものと、愚なるものとあるは、多く学ぶと学ばざるとに由りてなり、賢きものは、世に用いられて、愚なるものは、人に捨てらるゝこと、常の道なれば、幼稚のときより、能く学びて、賢きものとなり、必無用の人と、なることなかるれ、

幼稚のときは、先ツ日用什器の、名を記して、其用ゐ方を、知るべし○筆は、字を写し、又画を写す具なり、○算盤は、物を数ふる、用に供す、○文庫は書籍を納るゝ、箱なり、箆箭は、衣裳などを入れる器なり（以下略。文中旧字体は新字体に。以下同じ）

といったものである。文語文体であり、漢字なども小学校一年生用としてはむずかしい。もつとも、ごく最初の入門用としては、『小学綴^{注20}字書』^{注21}といって、「いろは」や「五十音図」や一種の単語集を収めた書物、あるいは『小学入門』^{注21}といって、「五十音図」「数字」「単語図」「連語図」「線及度図」や図形などを収めた書物を用いた教育もあったのである。ともあれ、右に示した『小学読本』の「巻一」は明治十六年刊の『小学読本』「巻一 初等科」（原亮策纂述）の「第一課」

処・足・歩・道

とほき処に ゆくに ひと足つゝ 歩みをはこびて やまざれば

いつしか そこにいたるべし をしへの道も また かくのごと
し

よりもかなりむずかしい。しかし、田中本の「凡地球上の人類は、五に分れたり、……日本人は亜細亞人の中なり」の文は、小学生によって暗記されたほどであったという。^{注2)}一瓢を知ってか知らずしてか、春の作文といえは「吾一瓢をたづさへて墨堤に遊ぶ」と書いたという往時の小学生の姿を髣髴とさせる話である。

田中本は卷三までに種々の読み物教材を組み合わせ、卷四は天体、空気、水などと理科的教材が収められている。これもウイルソン・リダーと同じ編集方針によっている。

次にB榊原本に触れてみよう。まず『読本首卷』に「いろは」「五十音図」と「漢字表」(数、十千、十二支、形、色……その他の項目別)が収められている。次いで「卷一」は

第一 家

人の住所の総名なり」柱、梁、桁、椽等を具へて作る」又屋根に瓦葺、草葺等有り」其明を引く処を窓といひ」出入る処を門といふと絵入りで始められ、以下身辺の動植物、日用品等の名称をあげ、絵入りで解説している。卷二、卷三も単語を解説したものであるが、卷二の十二までは天文、地理に関するもの、十三以下十七までは人体・人倫に関するものが多い。卷三は日常生活に関するものが多い。卷四、卷五は和漢洋の史話などから取材した教訓的な文章が多い。これらは言うまでもなく文語文体で、漢字もむずかしい複雑な文字が多く

用いられているが、それなりに当時の小学生は消化していったのであろう。

再び一葉の年譜を見ると、「明治十六年五月、青海小学校中等科第一級を五番で卒業」とある。そこで、小学中等科ではどんな国語教科書を使ったかということである。今ここに木沢成肅編輯『小学中等読本』(明治十四年六月二八日版權免許)がある。この本は、

文部省の新頒教則、中等三期ニ、漢文或ハ和文を誦読スルノ課業アリ、其綱領ニ照準シ、漢文読本を編輯シ、又之ヲ訳シテ和文トナス、其校生徒ノ便宜ニ因リ、各之ヲ採用スル為ニ、此撰アル所以ナリとし、漢文のもの三卷、和文のもの三卷より成っている。内容は「凡例」の四番目に

我国、君臣ノ大義名分を重ンスルハ、国体ノ然ラシムル所以ナリ、故ニ此書、多ク勤王愛国ノ事蹟ヲ抄出ス、其要生徒誦読ノ間固有ノ義氣ヲ奮発スルニ在ルノミとある通りである。

具体例を三文示しておこう。

○道隆ノ容儀

藤授政道隆・性酒ヲ好ム、酔ト雖少時ニシテ便チ醒メ、衣冠整然タリ、公事有レバ人之ヲ扶ケテ車上ニ上ラシム、或ハ盛服ヲ著テ、車上ニ偃臥ス、然レトモ事ニ臨メハ警醒シテ、容儀少クモ損セズ(卷一)

○少年慙愧ス

益軒嘗テ江戸ヨリ帰ル、路ヲ海上ニ取ル、同船数人、名姓相知ラズ、雜然トシテ相對シ、喋々トシテ相語ス、中ニ一少年アリ、亢顔ニシテ経義ヲ談ス、倨傲驕慢、傍人ナキガ如シ、益軒之ヲ聽キ、默シテ言ナシ、既ニシテ船・岸ニ達ス、是ニ於テ各・其郷貫姓名ヲ告グ、少年始メテ益軒タルコトヲシレリ、慝然トシテ自ら容レラレザルガ如ク、其姓名ヲ告ゲズ、鼠竄シテ去ル(卷二)

○ウエリントンの堅実

英人密林登性剛毅堅実ナルノミナラズ、私欲ヲ脱シ良心ヲ保チ、国ヲ愛シ、人ヲ愛シ、職分ヲ守リテ失ハズ、大艱難ニ遇ト雖、泰然トシテ、之ニ処シ、毫モ狼狽躊躇セス、冤抑ニ遇ト雖、憤悶セス、其才略將相ノ任ニ勝ヘタリ、其少壯ノ時、果敢ニシテ怒リ易シ、重用セラル、ニ及ヒテ、自省ミテ怒ヲコラシ、大ニ忍耐力ヲ得タリ、且敢テ誇ラズ、貪吝ノ念ナク、嗜欲ノ弊ナシ、真ニ不世出ノ英傑ト謂ベシ(卷三)

右の例は、各巻より無作為に選んで紹介したのであるが、文体は漢文訓読体であり、話題は、右の例は日本とイギリスであるが、中国の話もあり、要するに和漢洋の著名な話を集めていることがわかる。

また、ここに明治十七年四月版權免許、九月発行の『小学中等新選読本』(百束誠助・河原一郎関・平井義直編纂)がある。明治十七年と言えはもう一葉は学校を退いているが、この本も何らかの先行教科書をふまえて編述されているものと思われるから、やはり一葉就学時代の教科書をさぐる参考にはなるう。この教科書は仮名交じり三巻

(三巻は上下二冊)と漢文三巻の計六巻から成っている。例言によれば「此書或ハ修身上ノ格言事実或ハ歴史或ハ地理或ハ博物或ハ理化或ハ雑話小談等」を集めたもので、総合読本の趣を見せている。

この教科書の巻四、五、六は漢文であるが、この漢文は現在の高校生では苦心するかもしれない。出典を最初から順次あげてみよう。

(各巻重複作品は省略)

- 皇朝史略 大日本史 入蜀記 十八史略 近世叢語 国史纂論
 日記故事 蒙求 名賢言行略 近古史談 先哲叢談 塩谷宏陰の文
 赤穂四十七士伝 扶桑蒙求 名節録 純正蒙求 読日本紀 呉船録
 劉氏人譜 続近世叢語 博物新編 世説 孔子家語 (巻四)
 皇朝史略 日本外史 十八史略 先哲叢談 入蜀記 大日本史
 劉氏人譜 近世叢語 蘇東坡の文 劉向說苑 畜德録 近古史談
 蒙求 斎藤拙堂の文 続皇朝史 略 智囊 赤穂四十七士伝 鳩巢
 の文 名賢言行略 日記故事 国史纂論 扶桑蒙求 宋名臣言行録
 続近世叢語 安井息軒の文 大東世語 純正蒙求 塩谷岩陰の文
 名節録 長野豊山の文 林鶴梁の文 歐陽脩の文 柴野栗山の文 (巻五)
 塩谷實山の文 名賢言行略 皇朝史略 蒙求 先哲叢談 近世叢語
 純正蒙求 林鶴梁の文 十八史略 宋名臣言行録 日本外史 智囊
 続皇朝史略 国史纂論 赤穂四十七士伝 尾藤二州の文 続近世叢語
 入蜀記 近世叢語 大日本史 近古史談 安積良斎の文 名節録
 晏子春秋 五井蘭州の文 扶桑蒙求 博物新編 日記故事 劉向說

苑 坂井虎山の文 森田節斎の文 塩谷岩陰の文 佐藤一斎の文
ここに周知の二文を紹介しておく。(返り点、送り仮名は『日本教科書大系』△近代編4・講談社版△のまま)。

義家学三兵書一

源義家嘗過關白頼通第談陸奥軍事大江匡房隔座聞之曰彼有將才惜不知兵法也從者告之義家謂其或有之見匡房出就其車拜之禮甚恭遂師之学三兵書(大日本史)(小学中等新撰読本卷四)

韓信出胯下一

前漢韓信家貧嘗從下鄉南昌亭長食亭長妻苦之廼晨炊蓐食食時信往不為具食信自絕去至城下釣有漂母哀之飯信數十日信曰吾必重報母曰大丈夫不能自食吾哀王孫而進食豈望報乎淮陰少年又侮信衆辱信曰能死刺我不能出胯下信熟視俛出胯下一市皆笑以為怯及信為楚王召漂母賜千金及下鄉亭長錢百公小人為德不竟召辱已小年以為中尉告諸將相曰此壯士也方辱我時寧不能死死之無名故忍而就之(蒙求)

(小学中等新撰読本卷五)

以上のような国語教材に触れていたと考ええると、一葉の就学状態はきちんとしたものではないけれども、たいへんよい成績で高等科第四

級を修了していることから、古文、漢文の読解力はかなりあったものと推測できる。また、当時は文語文が盛んに書かれた時代であったから、彼女はかなり自由に家にある書物や貸本屋から借りた草双紙なども読むことができたと考えられる。

四

明治二十四年六月十日の日記に、

朝より空くもる。みの子ぬしとともに、今日は図書館に書物みに行かんの約成しかば、序をもて灸治にも行はやとて、ひるより家を出て下谷に行く。二時頃より、みの子ぬしと共に図書館に行。六時帰宅す。

と一葉は書いている。これが、図書館へ行ったことが日記に初めてでてくるところであるし、実際に一葉としては初めて図書館に行った日と見てよいだろう。この日から一葉の図書館通いは始まったのである。図書館とは言うまでもなく、いわゆる上野の図書館であり、一葉にとっての大切な学問所になってゆく。

そこで、最初に一葉が図書館へ行った日と借りた本および同行者を一葉の日記を資料にして表にまとめてみよう。

図書館へ行った日	借りた本	同行者
明24・6・10		田中みの子
6・19		田中みの子

<p>2 書名が()で囲まれているのは、借りただけで読まなかったもの。</p> <p>1 日付のみで書名の示されていない日は、一葉の日記に図書館に行ったことのみが記されている日である。</p> <p>△備考▽</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="315 222 507 357"> <p>11・16</p> <p>11・6</p> <p>11・4</p> <p>10・2</p> <p>4・14</p> <p>明26・3・2</p> <p>10・21</p> </td> <td data-bbox="315 367 507 714"> <p>△閉館のため帰る▽</p> <p>御伽婢子</p> </td> <td data-bbox="315 724 507 927"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="514 222 583 357"> <p>9・17</p> <p>9・16</p> <p>8・3</p> <p>7・27</p> <p>7・22</p> <p>7・21</p> <p>4・20</p> <p>3・22</p> <p>2・28</p> <p>2・17</p> <p>明25・1・13</p> </td> <td data-bbox="514 367 583 714"> <p>春雨物語 文山夜譚 哲学会雑誌 奇々物がたり くせ物語 昔々ものがたり 各国周遊記 雨中問答 乗合ばなし</p> </td> <td data-bbox="514 724 583 927"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="589 222 1179 357"> <p>11・8</p> <p>10・20</p> <p>9・26</p> <p>9・15</p> <p>8・8</p> <p>8・23</p> <p>明24・6・23</p> </td> <td data-bbox="589 367 1179 714"> <p>本朝文粹 雨夜のとし火 五雜俎 日本紀 花月草紙 月次消息 太平記 今昔物語(東鑑) 太平記(大和物語)</p> </td> <td data-bbox="589 724 1179 927"> <p>田中みをの(に会う) 田中みの子(に会う)</p> </td> </tr> </table>	<p>11・16</p> <p>11・6</p> <p>11・4</p> <p>10・2</p> <p>4・14</p> <p>明26・3・2</p> <p>10・21</p>	<p>△閉館のため帰る▽</p> <p>御伽婢子</p>		<p>9・17</p> <p>9・16</p> <p>8・3</p> <p>7・27</p> <p>7・22</p> <p>7・21</p> <p>4・20</p> <p>3・22</p> <p>2・28</p> <p>2・17</p> <p>明25・1・13</p>	<p>春雨物語 文山夜譚 哲学会雑誌 奇々物がたり くせ物語 昔々ものがたり 各国周遊記 雨中問答 乗合ばなし</p>		<p>11・8</p> <p>10・20</p> <p>9・26</p> <p>9・15</p> <p>8・8</p> <p>8・23</p> <p>明24・6・23</p>	<p>本朝文粹 雨夜のとし火 五雜俎 日本紀 花月草紙 月次消息 太平記 今昔物語(東鑑) 太平記(大和物語)</p>	<p>田中みをの(に会う) 田中みの子(に会う)</p>
<p>11・16</p> <p>11・6</p> <p>11・4</p> <p>10・2</p> <p>4・14</p> <p>明26・3・2</p> <p>10・21</p>	<p>△閉館のため帰る▽</p> <p>御伽婢子</p>									
<p>9・17</p> <p>9・16</p> <p>8・3</p> <p>7・27</p> <p>7・22</p> <p>7・21</p> <p>4・20</p> <p>3・22</p> <p>2・28</p> <p>2・17</p> <p>明25・1・13</p>	<p>春雨物語 文山夜譚 哲学会雑誌 奇々物がたり くせ物語 昔々ものがたり 各国周遊記 雨中問答 乗合ばなし</p>									
<p>11・8</p> <p>10・20</p> <p>9・26</p> <p>9・15</p> <p>8・8</p> <p>8・23</p> <p>明24・6・23</p>	<p>本朝文粹 雨夜のとし火 五雜俎 日本紀 花月草紙 月次消息 太平記 今昔物語(東鑑) 太平記(大和物語)</p>	<p>田中みをの(に会う) 田中みの子(に会う)</p>								

この表からわかることは、一葉の図書館通いは、明治二十四年、数え年二十歳の初夏のころから、二十六年二十二歳の秋までであること。そのほかにも行っているかもしれないが、そう何回でもないであろう。ここで、この表について、二、三のことに触れておきたい。

まず第一は、田中みの子と誘い合って図書館に通い始めたことである。田中みの子は、歌塾萩の舎で親しくした年上の友人であった。一葉と同じ年の伊東夏子と年上のみの子の三人は貴族、頭官の令嬢、令嬢の多かった萩の舎の中で平民組と称して仲よくしていたのであった。当時伊東夏子は神田甲賀町に住んでおり、田中みの子は下谷区谷中町に住んでいた。図書館に近いこともあって同行したのかもしれない。一葉が図書館へ通い出したのはなぜか、それは小説の執筆を志すようになって読書力の不足に気づいたことも理由の一つであろう。

第二は、一葉の図書館通いの目的に小説の種さがしがあつたことである。明治二十五年九月十六日の日記には、

十六日 晴天。図書館へたねさがしに行く。(下略)

とある。自分の創作のなんらかのヒントを得ようと考えたことは確かであろう。ちなみに九月十五日には「うもれ木」を書き上げて田辺花圃(後、三宅姓)に届けている。その翌日図書館へ行ったのは、次の作を考えてのことだったのである。

第三は、「うもれ木」と図書館で陶器のことを調べたこととの関係である。「うもれ木」は赤貧をいとわず薩摩陶器にうち込む陶工を描いた作品であるが、明治二十五年七月二十一日と二十二日を合わせた

日記に、

二一日二日と、図書館に通ふ。陶器のこと取しらべんとて也。

とある。これは、一葉が小説の師半井桃水との男女関係を疑われ、やむなく桃水のもとを離れたとき、萩の舎の先輩花圃が一葉の作品を當時の一流雑誌『都の花』に紹介しようということになり、七月十九日には陶工であった次兄虎之助に「御もと様に御相談申さねばならぬ事有之」と手紙を送ったりしている。そして、その直後、図書館に行っているのである。八月二十七日の日記には「いたく勉強したり」、二十九日には「小説勉強す」、九月五日には、「芝より兄君来る。」、六日には、「今日は筆ことの外動きてへうもれ木のV一回分書き終えたり。」とあり、やがて十五日の脱稿に至っている。

第四は、下谷区籠泉寺町に転居後、しばらくしてから、また図書館に通い始めたことである。明治二十六年十月九日の日記に

晴れ。此二日より、晴雨ともに日々図書館にかよひて暮しけるが、今日はえゆかで、奥なる一間にこもりて書をよむ。店は昨日

よりうれ高いと多く成りて邦子のいそがしきこと起居ひまなし。さるは近き処にもとより有ける家の、我家にうりまけて店とどけるが二軒あるよしに聞けば、それが為なるにや。さしもきそひ心などの有るにも非ず、おのづからにまかせて商ふものから、店をあづかる国子に運といふものあればなるべし。

これによると、八月に開店した荒物の店も順調に営業が行われたことがうかがえる。文学の道を捨てて商売によって生活を立てようと

し、母と一葉と妹の三人で塵の中に立ち、その前途にようやく光明が見えてきたとき、一葉はまた図書館に通っている。これは一大決心のもとに商売の道に入った者の行動としてはおかしいのではないか。だがそれには事情があった。というのは、これより先、これまた花圃の紹介で『文学界』への執筆を勧められ、二十六年三月に「雪の日」を發表して以後、『文学界』の星野天知からしばしば寄稿を勧められていた。^{注27}そして一葉自身も創作をやめるつもりはなかったとみられる。^{注28}商売も順調だったが、そんなとき、また星野天知から『文学界』への寄稿をうながしてきたのだった。さらに十月二十五日平田秀木が来訪して『文学界』への寄稿を勧めたし、一葉もこれに応ずる約束をしたのである。こうした背景のもとに十月、十一月の図書館通いがあったのであり、十二月發表の「琴の音」へと結晶されたのである。

五

一葉の読書は、以上のほかに友人・知人からの圖書の借覧によってもなされている。これは、一葉が他家を訪問したときに借りた場合もあり、知友が一葉宅を訪ねたとき持参した場合もある。また、「文学界」などの雑誌は出版元から送られたことも多く、一葉はかなりていねいに読み、一部は日記に感想を書き留めている例もある。次に、日記の中からこうした例を抜き出してみよう。

年・月・日	事	項
明24・6・14	妹邦子が関場悦子より書物を借りてくる。学海居士の「十津川」もある。	
〃	前島菊子(密の娘)から『むら竹』と涙香小史十二冊を借りる。	
〃	関場から『日本外史』『吉野拾遺』を借りる。	
〃	吉田(実?)来訪。『日本外史』(足利・北条)を貸して行く。	
明25	邦子が野々宮きく子より『女学雑誌』(他)を借りる。	
〃	山下直一より借りた『早稲田文学』を読む。	
〃	田中みの子から新刊小説を借りて読む。	
〃	荻野重省より書物を借りる。	
〃	荻野より借りた雑誌・山東京伝編『くもの糸巻』を通読。	
〃	『早稲田文学』の中の「徳川文学」「しらるる伝」ならびに「まくべす詳訳」「俳諧論」など四、五冊通読。	
〃	「くもの糸巻」読み終る。「雑誌」少し見る。	
〃	前島から『女学雑誌』を借り通読。	
〃	関場から『御伽草紙』上下を借りる。	
〃	山下来訪。『早稲田文学』九・十号を貸して行く。	
〃	半井桃水から雑誌『武蔵野』(創刊号)をもらう。	
〃	『武蔵野』(一豆)を読む。	
〃	「三人妻」(読売新聞)二十回ばかり見る(長齡子より借りる)。	
〃	『武蔵野』(三号・終刊号)を読む。	
〃	野々宮より『婦女雑誌』借りる。	
明26	荻野より『東京朝日』を借り、『朝日新聞』の小説五十回ばかり読む。桃水の「雪だる摩」と探偵小説もあった。	
〃	半井桃水来訪。『胡沙吹く風』上下を贈られる。	
〃	星野天知から『文学界』一号を送られる。	
〃	山下から『早稲田文学』四冊を借りる。	
明26・3・21以降	平田禿木から『文学界』二号を送られる。A禿木の手紙によるV	

〃	4・23	三宅龍子(花圃)から『文学界』三号を送られる。
〃	4・30	『文学界』四号を送られる。
〃	10・31	『文学界』十号および五号以下を送られる。
〃	12・1	『文学界』十一号を送られる。
〃	12・4	伊東夏子から『宇治拾遺』『西行撰集鈔』を借りる。
明27	3・1	『文学界』十四号を送られる。
〃	6・16	三宅龍子から『依緑軒漫録』と坪内鏡子より借りた小説も一緒に借りる。
〃	7・9	『艶道通鑑』四冊(小出祭の蔵書)を田中みの子のところから借りる。
明28	5・5	『太陽』五号を送られる。
〃	5・15	馬場孤蝶が来訪。春陽堂『しゃしん画報』と『文芸倶楽部』四号を貸していく。
〃	5・23	大橋乙羽から『日用百科全書 和洋礼式の部』を送られる。
〃	6・7	馬場・平田・川上の三君来訪。紅葉の『男ごころ』と『心のやみ』『珍本全集』など貸していく。
<p>[備考]</p> <p>1 右のほかに樋口家蔵書として前にあげた書物以外の書物(十八史略・文章軌範などを読書したり書写(九雲夢)したりしたことが日記に見える。これらは家の本か借覧したのか不明。</p> <p>2 贈られた雑誌のうち、『武蔵野』二・三号を贈られた日については日記に記録がない。</p> <p>3 一葉はこの他、自分の作品を発表した号の雑誌や新聞は読んでいたはずである。</p>		
<p>右の表から、前島菊子・関場悦子・吉田君(実?)・野々宮きく子・山下直一・萩野重省・伊東夏子・三宅花圃(龍子)・田中みの子・馬場孤蝶らから本を借りていることがわかる。日記の中から拾い上げたもので、一葉が書きもらしたのもあるうし、私の探しそねたものもあ</p>		

るうが、これだけでも借覧した数はかなりなものである。一葉の読書好きも広く知れ渡っていたので、来客も土産代りに本を貸して行った場合も多かったであろう。萩野氏や山下直一氏のように父の代からの知人が本を貸しているのに注目される。

また、本の貸与者が、樋口家の知人や妹の友人（関場・野々宮ら）などであったものが、だんだん一葉自身の友人や文壇人へと移っていくことにも注目される。

六

樋口一葉は幼時から新聞を読み、子供のころから『八犬伝』なども読んでいたという。こういう読書好きであったからこそ、変則的な学校教育しか受けず、二十四歳あまりの若さで亡くなったにもかかわらず、後世多くの読者を得るほどの作品を書き得るだけの知識・教養を吸収できたのであろう。彼女の作品を分析して、彼女の教養源を探ることもできるし、それはすでにかなり明らかになっている。今回、私は樋口家の蔵書・小学校の国語教材・図書館の利用・知友よりの借覧と贈与の四点から若干の考察を試みた。

一葉は、家の蔵書はかなりていねいに読んだことであろうし、小学校高等科第四級を一番で修了していることから学校の勉強はしっかりと修めたものと推察される。図書館は自分の意志で、しかも創作活動を助ける目的もあったから、充実した読書をしたはずである。友人

からの借覧もわかりである。これに加えて萩の舎が和歌の創作指導とともに古典教育にも力を入れていたから、一葉の古典についての教養はかなりあったと思われる。そのうえ一葉は、西洋文学についての新知識の持主であった『文学界』の若い同人たちのロマンティズムないはフェミニズムの対象としての華やいだ一時期を持ったのである。一葉の読書は、蔵の中で窓から射しこむ薄明りをたよりにした草双紙に始まり、『文学界』との出会いによって終わりを迎えている。

〔付記〕 小文の執筆に際して、塩田良平先生をはじめ、和田芳恵先生・関良一先生の御研究によるところが多かった。三先生の霊に感謝しあげる次第である。

(注)

- 1 「一葉観の問題」(『金城国文』) 昭和三十一年十月
- 2 龍子。旧幕臣で明治政府の元臣老院議官を務めた田辺太一の娘。三宅雪嶺の妻。萩の舎で和歌を学んだ旧派の歌人であるが、一葉の心を小説に向けさせる原因となった「藪の鶯」その他の小説を残した。(明治元年生まれ、昭和十八年没)。
- 3 「女文豪が活躍の面影」(『女学世界』) 明治四十一年七月
- 4 日本橋小田原町の商家の生まれ。母のぶも萩の舎の門人。明治三十一年田辺氏と結婚した。一葉の親友で、花圃の一葉観に対抗して『一葉の憶ひ出』(昭和二十五年刊)その他を残している。(明治五年生まれ、昭和二十一年没)。
- 5 『樋口一葉』(人物叢書50) 吉川弘文館 昭和三十五年七月刊
- 6 『樋口一葉』 十字屋書店 昭和十六年十月刊。
- 7 文筆では生活できず、実業に就こうと母や妹と相談し、いわゆる大音寺前(現在の台東区内)に転居した。

- 8 歌塾萩の舎の師。幼名とせ。中島又左衛門の娘。水戸藩士林忠左衛門の妻。夫が勤皇の武士として若くして死んだ後、江戸に帰り、旧派の歌人としての一生を送った。(天保十二年に生まれ、明治三十六年没)。
- 9 『樋口一葉』(講談社現代新書) 昭和四十七年五月刊
- 10 『第三章 萩の舎入門時代』(『樋口一葉研究』) 中央公論社 昭和三十一年十月刊
- 11 (板) 本版本
- 12 (活) 活字本
- 13 (写) 一葉の写本
- 14 (写不明) 筆者が父か他の人か不明
- 15 10と同じ。
- 16 『鑑賞日本現代文学 樋口一葉』(松坂俊夫編 角川書店 昭和五十七年八月刊)の年譜による。
- 17 エポカ学芸百科事典。旺文社 昭和四十九年六月刊
- 18 「近代読者層の機構とその変遷」(『近代文学の読者』長谷川泉他編 国書刊行会昭和五十五年一月刊)
- 19 『日本教科書大系』近代編・第四巻 解題(講談社 昭和三十九年四月刊)
- 20 榊原芳野編 文部省 明治七年八月刊
- 21 文部省 明治八年一月刊
- 22 19と同じ。
- 23 現在の国立国会図書館上野支部。初め東京書籍館、次に東京図書館、明治三十年には帝國図書館と改称し、俗に上野図書館の呼称で親しまれた。
- 24 明治六年十七歳で請負師田中市五郎と結婚し、長男を得たが、二十代で夫と死別。後に萩の舎に入門。美貌で梅のやと号した。大正五年に跡見高等女学校(現在の跡見学園)教諭となり和歌を教えたが、在職中に没した。(安政三年に生まれ、大正五年没)。
- 25 桃水と離れた一葉に対し、花圃は一葉の「うもれ木」を『都の花』に表できるように推薦の労をとってくれたのである。
- 26 八月二十八日に山梨で『甲陽新報』を発行していた野尻利作から投稿の依頼状が届いている。
- 27 明治二十六年四月六日付で「雪の日」が好評なので、五号か六号に間に合うようにというはがきが来ている。その後も、五月三日、六月十二日に『文学界』への寄稿を求めている。龍泉寺町へ移ってから、九月十八日(十六日付)に天知からの寄稿を求めるはがきが届いている。この他、平田禿木も熱心に寄稿を勧めている。
- 28 「一葉小説成立考」(『山形大学紀要(人文科学)』第三卷一号 関良一 昭和二十九年三月)